ハリー・ポッターと不遜な悪童

麻婆牛乳

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その男は不幸だった。

しかしその顔に陰りはなく、それどころかいつも笑みが浮かんでいた。

それはギザギザな歯を剥き出しにし、赤黒い目を怪しく光らせる邪悪な物で、無垢な笑みとは程遠かったのだが。

そんな男が、ある日突然生活に大きな変化をもたらされる事となったお話である。

目　次

悪ガキは魔法を憧れる ―― 1
物も人も ―― 9
波乱の予感の初登校 ―― 18
別れるのは寮だけではない ―― 28
煽り立てて魔法薬 ―― 37
ちょっとした応用 ―― 45
唯我独尊で傍若無人 ―― 57

悪ガキは魔法を憧れる

「ケヒヒヒヒ……」

それなりに値の張ったスケートボードを無造作に放り捨ててドカリ、とソファーに座り込む。今日はかなり滑りまくったからかなり疲れた。

夕日の差し込む家の一室、上着のフードも取らずに顔を隠したまま冷えた水を飲み、届いていた宅配物に目を通す。

「……あん？」

ふと、１つの封筒を手に取る。

上等な羊皮紙を使用した封筒だったが、封は蝋を使用した物だ。

上手く言い表すことが出来ないが、他に比べると明らかに妙な手紙だった。

「……んだよ、コレ」

開封し、入った紙を開く。

すると……

親愛なるレネ・ショーペンハウアー

この度は、貴殿のホグワーツ魔法魔術学校への入学をお知らせでき、嬉しく思います。

必要な本や道具のリストを同封したのでお確かめ下さい。

同封された紙には鍋や教科書、杖といった物品が書かれていた。

ここで大きく首を捻る事になった。

「魔法……学校だと？」

宛てた名前はレネ・ショーペンハウアー……俺の名だ、間違いない。

学校は消えた母親から入学を止められていた……のは置いておくとして、魔法学校ときたか。あまりにもおかしな話だ。

只のイタズラか、と思い手紙を手放す。

「クソ親父め」

ニヤニヤとした顔でそんな侮辱を吐き、もう1枚の手紙を取る。やはり親父からの手紙だ。
「……は？」
笑みは消え失せ、口をあんぐりと開いたまま手紙を取り落とす。その手紙には……

我が息子へ
すまん、すっかり忘れていたがお前にホグワーツからの入学招待状が届く頃だったと思う。１１になったんだからな……まてよ、１０だったか？
まあそれは置いておこう、お前をビックリさせるために魔法はずっと内緒にしていたんだ！ホグワーツに入学する為に普通の学校へ行かせる訳にはいかなくてなぁ、兎に角母さんは離れられないだろうから俺様が準備の為に迎えに行ってやりたかったが、そうはいかないので代わりを寄越す。
８９９のカギも同封する、大事に持っていろよ！
お前の愛する父より

数秒間の硬直、立ち尽くす俺。
つまりだ、整理すると……俺は魔法学校に入るということだ。親父はそれを隠していた。
「……」
纏めてみると、改めて異常な状況に置かれている事が分かる。ドッキリか？手の込んだ冗談？
色々な考えが頭を巡り、自分で何をすれば良いのか分からなくなったしまった。

次の日、午前中ながら俺の目はこれ以上に無いほど冴えていた。勿論、２枚の手紙のせいだ。
取り敢えずメシでもと、着火していないタバコを咥えながら冷蔵庫

から豆とベーコンを取り出した直後、ドアのノックが聞こえた。
「まさか……」
　食材を冷蔵庫に放り込み、タバコを仕舞ってがちゃりと慎重にドアを開けてみると、相当に年齢を重ねた様な魔女が立っていた。……いやおかしい、魔女なんてこの世に居るわけねえ。昨日の手紙で舞い上がってるだけだ、俺が間違えたのはそれっぽい帽子とローブ着てるコイツが悪いんだ。こういうのはなんと言うのだったか？確か……、干し草の中の針を探す、っつうんだったか。そう、多分それだ。この間実に０．２秒。
「レネ・ショーペンハウアー？」
「……ああ」
「ホグワーツの使いです」
　……マジか？マジかマジかマジか!?
　大人の本気のドッキリとでも考えた方が余程正気の筈だが、ここまで真に迫ると流石に疑うより強い感情が生まれる。
「……ショーペンハウアー？」
「……サイッコーだぜ親父ぃ……！」
　気の赴くまま、思い切り胸の内をぶちまけた。

「私はミネルバ・マクゴナガル、副校長兼変身術の授業を受け持っています」
「あー、あの、マジで魔法ってあんの？」
　部屋に招き入れたホグワーツの使いマクゴナガルの自己紹介に対して問い掛ける。するとマクゴナガルは眉を潜めた。
「エッケハルトから聞いてないのですか？」
「ああ……コレだ」
　マクゴナガルに昨日の親父の手紙を渡す。読めば読むほどマクゴナガルの眉間のシワがマリアナ海溝に近くなる。
「学生時代からちっとも変わってないのですね……エッケハルト」
「もしや親父にも魔法を教えていたのか？」

「ええ、その通り……何事にも非常に適当で放浪癖があるという点で有名でしたね」
「まあそうか、俺だって顔すら覚えてない」
　ウンウンとにやつきながら相槌を打つ。物心ついた時から親父を見たことはない。息子にすら会ってないのは放浪癖で済ませて良いものか。
「待ってください、トルーディは……貴方の母親は４年前に失踪した筈です。その年齢でずっと１人で過ごしてきたと？」
「そうだが？まあ、このトシでも雇ってくれる、いい職場、もあったしな……多分、親父はおふくろが失踪した事すら気づいてないぞ」
「……」
　信じられない、といった目で見つめられる。
　まぁもう慣れたし、金は送られてくるから問題なく生きてはいけた。遊ぶ金が足りなくてグレーなバイトをしてやりくりしているが。
「礼儀がなっていないと思っていましたが……むしろ、その程度で済んで良かったですね」
「おっと、コイツは失礼」
「私はこの状況を知っているのである程度なら許容はします。が、他の先生の前ではしっかりと礼節を弁えるのですよ」
　これには少し驚いた。マクゴナガルはかなり厳格なイメージがあったが融通が効く。顔だけを見て決め付けただけだったが。
「では、行きましょうか」
「あぁ？何処にだ？」
「ダイアゴン横丁、ロンドンへ」
　昨日の今日だがやはり驚く、ロンドンはイギリスにある筈だ。かなり移動時間がある……少なくとも１，０００ｋｍは離れている。だが断る気は更々無かった。
「気が早えな……遠出の準備をしてくる」
「その必要はありません、普通の外出の準備で構いませんよ。この手紙に書いてある鍵も忘れずに持っていく様に」
「はあ？」

間抜けな顔で返事する。が、思い直して言われた通りに準備する。1分も掛からない。
「それでは私の腕をしっかりと掴んで、決して到着する迄手を放してはいけませんよ」
「……ああ」
これまた言われた通りにする。というのも、今からやろうとしている事に興味津々で心臓が跳ね回りそうな程鼓動が激しい。
「しかし、今更ながら何故自室でフードを被っているのですか？」
「暗いのが好きなんだよ」
「ふむ……まあ良いでしょう」
その瞬間、景色が……言い表せないような目まぐるしい変化を遂げたかと思ったら、急に眩い光が輝き、咄嗟に目を閉じた。
「うおっ!?」
続いて落下する様な感覚に見舞われ、手をついて跳ね起きる。見回してみると、知らない大通りに立っていた。
「……なあ、まさかとは思うが……ここはロンドンか？」
「ええそうですよ。ダイアゴン横丁、必要な物はここで全て揃うでしょう」
あっさり答えるマクゴナガルには目もくれず、目をギラつかせながら大通りを見回す。異常だった、よく分からない物のビン詰めや妙な形の鍋っぽいものが並ぶ店やら、俺よりも2回りは小柄なのに顔はそれなりの年齢を重ねている通行人に至るまでが興味を引いた。
「見て回りたい気持ちは分かりますが、先にやることがあります。着いてきて下さい」
「……ああ」
間違いない、瞬間移動といいこの街並みといい、魔法は存在すると認めざるを得ない。
だがここに来て驚きよりも大きな感情が芽生えていた。それは歓び――
「今までの生活も悪くはなかったが……俺はこれから魔法を学ばせて貰える訳だな？」

「そういう事になります。優良な模範生となる事を期待していますよ」
「ク――クケケケケッ」
　そんな言葉を発しながらもこっちを振り返らないマクゴナガルを見て笑いを漏らす。期待なんてしていないのかマニュアル通りの言葉だからか。そうこうしている内にある建物の前で立ち止まった。
「グリンゴッツ銀行、まずは勉強に必要な物を揃える為にお金を引き出します」
「あー、滅茶苦茶言いにくいんだが……持ち合わせはあんまりないぜ？」
「問題ありません、鍵はありますね？」
　そう言われて上着のポケットから親父から送られてきた鍵を取り出す。
「恐らくエッケハルトが必要な額を用意してくれている筈です、金庫を見てみましょう」
「あの親父が？残してくれている？」
「少なくともあの文章を見る限りでは貴方を愛している筈、であれば心配はいりません」
「俺のトシすら曖昧なのに？」
「……」
　これにはマクゴナガルも何も言えなかった。簡単な話、そういう面で親父は信用が無い。
「ご用件は？」
「金庫へ」
「畏まりました」
　入り口近くで待機していたしわくちゃ顔の小人の後に続く。無愛想ながら礼節は完璧だった。まるで俺と正反対だ、等と考えながら小人達のお辞儀を尻目に、エレベーターから降りて暫く歩くと妙な空間に出た。
　妙な乗り物の左右にはレールが敷かれており、暗くて奥は全く見えない。

「番号は？」
「あー、８９９だ」
恐らくコレだと思われる番号を伝えると小人がガチャリと装置を動かし、足場がゆっくりと奥へ向かって動き出す。
「……スッゲェ……」
「……」
思わず漏れた感嘆の声にマクゴナガルは反応しなかった。
と、小人がこっちに向かって手を差し出す。
「鍵を拝借」
「あ？ああ」
その小さな手に鍵を乗せる。よくよく見てみると小人と言うには指が長い……小人と言うよりかは別の種族なんじゃあないか。
足場が止まると同時に小人は重厚な扉の鍵を開き、俺達の方に向き直る。金庫の中へと先に進んだのはマクゴナガルだった。
「へぇ、これは……」
「……」
俺も無言で金庫の扉をくぐると、中は小ぢんまりとした空間となっており、中央に金貨の小さな山が置いてあった。
見たこともない金貨だった。こっちとあっちでは通貨がまるで違うという事か。小人も中へと入ってきて口を開いた。
「７３０ガリオン、この金庫の持ち主は毎月１０ガリオン程づつ入金に来ておりました」
「中々の大金ですね、エッケハルトとしては上出来な額を……おや？」
マクゴナガルが部屋の奥を見る。
よくよく目を凝らして見ると、何やら金貨の向こう側に黒い物が見えた。薄明かりで照らされてはいるが、それでも何があるのか分からない程真っ黒な物体だった。
「なんだコリャ？」
拾い上げてみるとそれは布だった。それも3枚ある。ある程度明るい場所に持っていっても見た目が分からない。光を全て吸収してしまう程の黒さだったのだ。

「その形は……ローブの様ですが」
「ローブ？」
　言われてみれば確かに、この大きさは恐らく衣類だという事が分かった。着てみるべきだろうか？等と思いながらもう一枚のローブを手に取ってみると、はらりと紙が1枚地面に落ちた。
　それはまたしても手紙であり、クソ親父の直筆で書かれていた。

　愛する息子へ
　入学祝いにこのローブをお前に託す。俺様の自作だが、値段の付けられない改心の出来だと自負している。どうか大切にしてくれ。

　短い文章だったが俺へのプレゼントだという事が分かった。手紙をマクゴナガルに渡すと表情を和らげ、嬉しそうに口を開く。
「着てみなさい、きっと良いものですよ」
「そうか？そんじゃあ早速……」
　いそいそと上着を脱いでローブの袖に手を通す。あまりに黒いせいで袖が何処にあるのか分からず苦労したが、なんとか着用出来た。
「どうだ？変じゃないか？」
「ええ、ええ、よく似合っていますよ。どこからどう見ても魔法使い見習いですね」
「見習い、か……ケケケケ」
　その感想は当たり前だった。明らかに俺の身長で身に付けるには大きすぎるローブだったから、フードも袖もかなり大きいのだ。しょうがねえなと思いながらローブのポケットに手を突っ込んだその時

―――

「は？」
「え？」
　ポケットの内部で擦れる筈だった布が無く、手が空を切ったのだ。

物も人も

「面白えな、こりゃあ！」
闇夜そのものと言えるローブを翻し、フードに隠れた顔からギザギザの歯を剥き出して笑いながらダイアゴン横丁へと戻ってきた。
更にこのローブには＜物入れ＞としての機能が付与されているらしく、ポケットはおろか裏地にまで様々な物を詰め込む事が出来たのである。先程まで着ていた上着に残ったローブ２着、金貨の３分の１程を詰めてみたが、ローブの重量は変わらない。俺はこのローブを大層気に入った。
「窃盗には気を付ける事ですね、そのローブは手紙の通り価値が付けられません」
「マジで？アンタ……いや、先生サマ程の年季が入った魔女でもそう思うか？」
「ええ、その通り……さあ、次は教科書です」
ある意味で目立つローブで通行人の目を釘付けに、フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店と書かれた店の前に立つ。しかし店名は全然気にせず、中に入ってあちこちを見回した。
「教科書ってのは全部買うのか？」
「必要のない授業もありますが、兎に角この７年間で使うものは全て購入します」
「そうか……７年間!?」
驚く俺に奇怪そうな目を向けるマクゴナガル。
７年間、つまりは１８になる迄は学校に通い続けなければならないという事――
「……暇潰しになりそうな本でも買うか」
「ホグワーツには図書館があります。それを見てからの方が良いと思いますが？」
「いやいい、２冊位見繕う」
そうして数分後、山のように積まれた教科書に加えて＜決闘の歴史＞及び＜多種多様な魔法薬＞と書かれた分厚い本を購入し、すぐさま

ローブの中へと全て詰め込んだ。荷物の気にならない買い物は素晴らしいものだ。
次は鍋を選ぶ番だったが、これは素人目には全く分からなかったのでマクゴナガルに選んでもらう事にした。
「あの勝手にかき混ぜる機能の付いた鍋とか、面白えな……」
「あれは客寄せ商品、買うのは富豪や大量生産を要する者、そして愚か者ですね」
「む、俺の事か？」
「いいえ、貴方は目新しい物に目を奪われただけですよ……ふむ、これが良いでしょう」
そうしてなんとも飾り気の無い鍋を購入、ローブの裏地に放り込む。何でも入るなコレ。
便利なローブに感心していると、とある店に目が止まった。イーロップふくろう百貨店だ。
「ありゃあ……フクロウ専門店か？」
「ええ、興味があるのですか？」
「いやまあ……フクロウだけの専門店ならな、ペット専門店ならまだしも」
「ふくろうは魔法界の連絡手段でもありますからね、見ていきますか？」
これに二つ返事で了承し、店内へ足を運ぶ。
その途端、店内の数十匹のフクロウ達がこちらを見て後ずさった。
「おーおー、俺嫌われてる？」
「いえ、怪しんでいるのだと思われますね……いらっしゃいませ」
店員が困った顔をしながら声を掛けてくる。しかし俺は肩を竦めて首を振った。
「こりゃハズレだったかな」
「まあ見ていって下さいよ。マクゴナガル先生といらっしゃったという事は学校に連れていくペット探しですね？」
「は？」
学校に……連れていく……!?なんなんだ、学校にペットとか何でも

ありかよ……とか思っていた所でマクゴナガルが口を開いた。
「全寮制の学校ですからね、手紙や荷物を運ぶ為にふくろうを飼うことをお勧めします」
全寮制……そうか、ホグワーツは全寮制か。
きっと親父は手紙を送ってくるだろう、それならばフクロウは必要になるかもしれない。
「とはいえ、全部ビビっている様だが？」
「……いいえ？」
店員は首を横に向けてニヤリと笑う。つられて見てみれば、1羽のフクロウと目が合った。
「……へぇ」
近寄ってみるが、周りのフクロウは全て逃げていくのに対し、コイツは逃げるどころか俺を見つめたまま動かなかった。
「コイツ、くれよ」
「毎度！」
こうして1羽のワシミミズクを鳥かごに入れ、飼育に必要な物を一通り揃えて俺とマクゴナガルは店を後にした。流石にコイツはローブに入れる訳にはいかないだろう。
と、マクゴナガルが何かを見つけた様で、そちらの方に歩いていくので後を追った。
「フリットウィック先生」
「ああマクゴナガル先生、貴女も案内を？」
そう言って軽くお辞儀をしたのは背丈が小さいが小綺麗な身だしなみをしたおっさんだった。先生という事は俺もコイツから学ぶのか。
マクゴナガルは少し話し込んでしまったので、向こうの案内されていた生徒を見やると、家族連れの茶髪の女が俺を見るなりギョッとした顔をしたので少し吹き出しそうになった。
「テメェも新入生か？」
「え、ええそうよ……という事は貴方も新入生なの？何故フードを被っているの？」

「別に被っちゃいけねぇ法律はねぇだろうよ」
キシシ、と笑ってみれば女は出会いたくなかった、と言いたげな目で俺を見る。あーあ、学校が始まる前から嫌われちまったか？
「ま、学校で会ったら宜しく頼むぜ」
「……ええ」
表情とは真逆な返答を聞き、マクゴナガルの方を見るとマダム・マルキンの洋装店という看板の掲げられた店の前に立っていた。話が終わるまで律儀に待ってくれている。
そちらに歩きながら手を振り、じゃあなと言ってその場を後にした。
「待たせたな」
「構いません、親交を深めるのは良いことですからね」
「深まったのは明らかに溝なんだが？」
「確かに……マグルにとって貴方は余りにも不審な立ち振舞いですからね」
マダム・マルキンはてきぱきとマクゴナガルと話している俺の体を採寸し、シャツにズボン、ネクタイや靴まで見繕ってくれた。
その間に「ネクタイの締め方なんて知らない。ネクタイ、で、締めるなら得意だが」等と言うべきではなかった。言った時のマクゴナガルとマルキンの顔で5分間は笑いが堪えられなくなったからだ。
「ギャーッハッハッハ！将来が心配だなぁ！」
「……全くです、他の生徒に悪影響が出なければ良いのですが」
妙に上機嫌な俺と態度には出さずともげんなりとした雰囲気のマクゴナガルは最後に買い物をする店に辿り着いた。
オリバンダーの店、紀元前３８２年創業……恐ろしい程昔から存在しているだけあって店は相応にボロっちい。
「いらっしゃいませ……おおミネルバ！モミにドラゴンの心臓の琴線２４ｃｍ、非常に堅い！」
「お変わりなく、オリバンダー」
やや困ったようにマクゴナガルは眉を下げた。目の前のじいさんは嬉しそうな顔をしてこっちの方を向いた。

「今日はその子の杖選びじゃな？」
「杖腕は右です、お任せしますよ」
杖腕？杖腕ってなんだ？と思ったが恐らく利き腕であろう事を察し、右手に持った鳥かごを入り口辺りに置いた。
「それでは腕を拝借……ふむ、ふむふむふむ」
「面白え杖を頼むぜ、じいさん」
オリバンダーはにっこりと笑い、棚から1本の杖を取り出してこちらに持ち手を向ける。
「まずはこれで小手調べ、マツにユニコーンの毛２８ｃｍ、安定性重視……振ってみてご覧」
杖を受け取って無造作に振ってみると、つむじ風が起こって紙が顔に張り付いた。
「ぶえっ、風が出た！」
「ふーむ合わぬか……ハナミズキにドラゴンの心臓の琴線２６ｃｍ、イタズラ小僧」
受け取って振ってみるとマクゴナガルのトンガリ帽子が飛んだ。帽子が床に落ち、入り口のワシミミズクがホゥ、と鳴いた。むせた。
「リンボクにドラゴンの心臓の琴線２８ｃｍ、生まれながらの戦士」
これまた振ってみると、火の粉が飛んで棚に火がつきそうになったがマクゴナガルが杖を振って消し止めた。
「ふむ、ヤマナラシにユニコーンの毛３２ｃｍ、小さな争い事に向く」
３秒後、店は何も見えないほどの閃光に包まれたがすぐに収束していく。オリバンダーはうんうんと頷いた。
「成る程、この子は戦闘向きじゃな。しかしこの杖も合っているとは言い難いのう……名前を聞いても宜しいかな？」
「俺か？レネ・ショーペンハウアーだ」
「ほう、エッケハルトの子か！リンボクにドラゴンの心臓の琴線３６ｃｍ、忠誠の騎士！」
オリバンダーは後ろから箱を取り出して、中から彫刻が成された杖を取り出す。
「彼の子でありその佇まい、ならばこの杖が正解であろう！レッド

オークにドラゴンの心臓の琴線３８ｃｍ、まことに気難しい！」
　テンションの高いオリバンダーから杖を受け取ると、その瞬間杖は青い光に包まれ店内が青い炎に包まれる。マクゴナガルが急いで杖を取り出したが炎は虚像だった様で店を焼く事はなく、完全に俺達３人を包み込んだ。
「素晴らしい！こんな光景は初めてじゃ！」
　そう叫んだオリバンダーは俺の手から杖を抜き取ると青い炎は嘘のように消え失せ、箱に仕舞った杖を差し出した。
「レッドオークは身軽で器用な所有者に向くのじゃが、ドラゴンの心臓の琴線と合わせたこの杖の所有者は極めて稀。君は特別じゃよ」
「へぇ……嬉しいねぇ」
　代金は８ガリオン、これまで買った物の中で一番高額だったが全く惜しくない。細長い箱を前ポケットに押し込んでオリバンダーに向き直る。
「あんがとよじいさん、長生きしろよ」
「ありかとうございました」
　キチンと礼を返すオリバンダーを尻目に、鳥かごを持って店を出た。
　これで買い物は全て終わりであり、欠伸を噛み殺しながらマクゴナガルに問いかける。
「買っておいた方がいいものとかあるか？」
「そうですね……持ってはいないでしょうから羽ペンやインク等の筆記用具等の小物は買っておいた方が良いでしょう」
　そうして俺は筆記用具店で必要な物を購入し、それとは別に好奇心に負けて魔法薬材料店に入っていた。様々な物がビンに入って並ぶ光景に俺のテンションは昂っていた。
「すっげぇ！魔法使いの店みてぇだ！」
「まごうことなき魔法使いの店ですよ」
　よく分からん蛇の脱け殻や酢漬けナメクジ、乾燥した草等使い方が分からなくても見ているだけで面白く、目を輝かせて店内を歩き回った。

「コレ買ってもいいのか!?いいよな!?」
「構いませんが……魔法薬を外で作るのは禁止されていますよ?」
「大丈夫!並べて楽しむだけだ!」
「……」
　呆れ顔のマクゴナガルを無視して次々と購入していく、こういう怪しげな物は見ているだけでも楽しいものなのだ。
　ついでに騒いだせいで嫌そうな顔をしていた店員も、店を出る頃には大量購入のお陰でとても嬉しそうな顔になっていた。
「それでは最後に、ホグワーツへの行き方を教えて終わりにしましょう」
「ん?この辺じゃないのか?」
「ええ、ここからは少し離れていますからね。よく見ていて下さい」
　そう言いながらマクゴナガルは杖で壁を軽く叩くと、ひとりでに煉瓦の壁が開いていく。煉瓦の向こう側は妙な雰囲気の酒場と繋がっていた。
「隠れた道か、面白えな……」
「おや先生、また新入生の案内ですな?」
「ええ、まだ数名は案内する予定です」
　店主にそれだけを言い残してマクゴナガルはさっさと歩いていく。酒場の空気が苦手か、合わないのだろう。
　俺は店をぐるりと眺め、店主に聞いてみた。
「ここの客は全員魔法使いなのか?」
「今のところはな、存在さえ知っていればマグルでも入ることは出来るがね」
「マグル?なんだそりゃ」
「魔法使いじゃあない者の総称さ、先生が待っているから行っておいで」
　入り口の方を見るとマクゴナガルがこちらを見て待っている、とことん律儀な性格だ。悪い悪いと謝罪しながら外に出ると、車やスーツを纏った通行人が行き交う、見慣れた光景があった。
「向こうの方にキングス・クロスという駅があります。そこからこの

切符で列車に乗ってホグワーツまで一直線です」
「……あれ、この切符おかしくねぇか？」
手渡された切符には９と３と４が妙な配置で刻印されている。行き先も書いておらず、どう見ても切符には見えなかった。
「その切符を持って……そうですね、９番線と１０番線の間で他の生徒達を待っているのが良いでしょう。この格好で駅まで行くのは人目を引きますからね」
「もう今更じゃねえか？」
そう、もう俺達は大通りに出ている。運が良いのか誰にも見られている様子は無いが。
「ここなら大丈夫です。この＜漏れ鍋＞は知っている者にしか認識できませんからね」
「……つくづく便利だなぁ」
嘘みたいな実体験の数々、これを毎日経験すると思うと……笑みを溢さずにはいられない。
１日でも早く、ホグワーツとやらに行きたくて仕方がなかった。
「では、腕を握って」
「ククク……あいよ」
鳥かごを抱え、片手でマクゴナガルに掴まる。この瞬間移動はもう驚く事はなかった。
……鳥かごの中で硬直する友人を除いては。
家に到着して時計を確認すると、まだ昼間になろうとしている所だった。
「９月１日、ホグワーツ行きの列車は切符に書いてある時間通りに発車します。少々遠いですが大丈夫ですか？」
「ああ、前日に移動してロンドンのホテルにでも予約して泊まるさ」
「それでは最後に、魔法を使いたい気持ちは分かりますが、こちらで魔法を使うと魔法省から厳罰を下される事となります。隠れて使おうとしても分かるので絶対に使用してはいけませんよ？」
「……ああ」

「……絶対に守って下さいね？」

滅茶苦茶悩んだ末に返答した俺を見て、心配そうな顔を残してマクゴナガルは消えていった。

今日は８月２日、長い長い１ヶ月の始まりだ。

波乱の予感の初登校

「ゲフッ」
　エンドウ豆とベーコンを平らげて一息つく。向かいにはネズミとウズラのペーストを豪快に貪るワシミミズク。それももう、無くなるのは時間の問題といったところだった。
　ちらりと時計を見やると、そろそろ出発の時だという事が分かる。
「アーディ」
「ホゥ」
　返事をする様に鳴くワシミミズク、アーディ。嘴がベタベタになっていたので拭いてやった。
「まだ欲しいか？」
「ホゥ、ホゥ」
　２回鳴くのは拒否のサインだ。コイツは賢く、ある程度のコミュニケーションならばしっかりとこなす事が出来た。食事の仕方はすっかり俺に似てしまった様だが。
「よし、行くぞ！」
　アーディは鳥かごの中へ飛んでいき、自分でかごを閉めた。そのかごを手に、ローブを着た俺は家を施錠して飛び出した。
　８月３１日、まだまだ早朝であったが到着時刻を考えるとこれでも少し遅い位だった。

「あーつっかれたぁー」
　９月１日、ホテルから出た俺は首を鳴らしてダイアゴン横丁を歩いていた。流石に１６時間に及ぶ電車の旅は堪えた、ホテルでしっかり眠ったものの疲れはとれていない。
　アーディもヘトヘトだった様で、今は嬉しそうに横丁の空を堪能していた。
「さーてまた魔法薬の材料を見て……あ、学費の事を考えると金を引

き出した方が……」
　少し余裕があったので、色々と横丁を見て回る事にした。まずは魔法薬の材料だ。
「いらっ……いらっしゃい！」
「お、おう……」
　女の店員はどうやら顔を覚えてた様で、ニコニコしながらこちらを見ている。ちょっと引いた。
「なんか面白いのあるか？」
「新しいのだと……マンドレイクと、あとベゾアール石が久々に入荷したよ。両方とも少し値が張るけどね」
　こうして再び魔法薬の材料で散財する事となった。干からびたマンドレイクは、正直直視すると笑いが止まらなかった。

「この辺りのハズだが……」
　キングス・クロス駅、その9番線に到着したのは発車の1時間前だった。中々にデカイ駅で人の往来も激しく、こんな所に魔法学校への直通列車が来るとは思えない。
「……ん？」
　と、1人の男が目に入った。カートを引き、大荷物を抱えた丸眼鏡の男が何かを探すようにキョロキョロしている。
　間違いない、新入生だ。その証拠に荷物の上には真っ白なフクロウが鎮座している。
「よぉ、お前もか？」
　男は俺を見て目をぱちくりさせて後ずさった。その気弱さに大笑いしてそのまま続ける。
「ヒーッヒヒヒ、心配すんな！取って食おうなんざ微塵も思っちゃいねえよ。その荷物からするとお前も新入生なんだろ？」
「う、うん。だけどこの9と4分の3番線っていう所が分からなくて探してるんだ」
「やっぱりか、まあこの辺りの筈だろうが……オイ、あれ見てみろよ」

男を振り向かせると、またもや大荷物を抱えた女が家族と話していた。ひとしきり話した後、女は壁に突っ込んでいったかと思うと……壁に吸い込まれる様に消えていった。
「オイオイオイ、面白いじゃねえかオイ」
「あ、あんな所に入り口が……」
「他に何があるってんだよ……ついてこいよ、俺が先に行ってやるからよォ」
壁に手をつこうと手を伸ばすが、その手は壁をすり抜けていく。ニヤリと笑って一気に通り抜けると、立派な汽車が停車している場所に出た。
男も壁を抜け、汽車を見て再び驚いていた。
「ようこそ魔法の世界へ、ってか？」
「す、すごい……」
「さあさあ行こうぜ、席を取らなきゃ立ち乗りになっちまうぞ」
男を急かして乗り込んでみると、やはり中もかなり豪華な装飾に彩られており、わざわざ座席は全てコンパートメントになっていた。魔法学校への直通便でコレだと考えると、学校自体もかなり豪華だろうと予想出来る。
しかし搭乗者は既に居る、それどころか後ろの男と座る為の座席2つすら空いていない。が、漸く空いている座席を見つけた。
「ココ、座ってもいいか？」
1人だけで座っていた赤毛の男は顔を硬直させて首を縦にブンブンと振った。俺はニヤニヤしながら心配そうな顔でついてきた男を手招きし、コンパートメントに入ってアーディを荷物置き場に置いた。
「いやー良かった、座れねえかと思ったぜ」
「ねえ、さっきから思ってたんだけど君の荷物ってあのフクロウだけなの？」
「ああ？そうだが？」
「教科書とかは……？」
「ホレ」

ポケットに突っ込んだ手を抜き、変身学の教科書を取り出す。そうして2人が硬直している間にまたポケットへと仕舞い込んだ。
「凄い……それも魔法なの？」
「こういうローブなんだよ、別に魔法を使った訳じゃねえよ」
「こんなの見たこともないや……」
キラキラとした目で見つめる丸眼鏡君。これはあれだ、新しいスケートボードを買ったときに万年金欠の学生に見つめられた時の目と同じだ。優越感に浸れるから嫌いじゃない。
と、赤毛君が口を開いた。
「自己紹介してなかったね、僕はロン・ウィーズリーだよ。君達は？」
「俺はレネ・ショーペンハウアーだ」
「僕はハリー、ハリー・ポッター」
ロンがまた驚愕の表情を浮かべる。見ていて飽きない面白い奴だ。
「ハリー・ポッター!?凄い！こんなところで出逢えるなんて！」
「ん？コイツ有名人なのか？」
「有名も何も、＜例のあの人＞の魔の手から唯一生き残ったんだよ！魔法使いの間では知らない人は誰一人として居ないんだよ!?」
「うーん……知らんな」
「僕も本当なのか分からないんだ、人違いなんじゃないかと思っているんだけどね」
ハリーの顔を見てみるが、確かにこんな人畜無害そうなお坊ちゃんがそんな有名人だとは思えない。というか＜例のあの人＞って誰だよ。
とか何とか言っている間に列車は動き出した。列車の窓から見送りにきた人だかりが見える。
「じゃあレネってマグル出身なの？」
「マグルは魔法使いじゃない奴だったか？そういう意味で言うなら俺はマグルじゃねえ」
「そもそもこんなローブを持っていたらマグル出身な訳がないか、ごめんごめん」
そんな問答を繰り返し、俺達を乗せた列車は青い草原を駆け抜けて

いった。

「お菓子はいかがですか？」

発車してから暫くして、妙ちくりんな菓子が詰まったカートを押した女がやってきた。車内販売まであるとは、ホグワーツ恐るべし。

「僕はいいや、持ってきてあるから」

ロンはそう言って使い古しの巾着を取り出す。あまり裕福ではないのだろう……同じ席に座ったよしみだ、好きなモンでも買ってやるか。等と考えていたが、ハリーがポケットを探り――

「ぜーんぶちょうだい！」

満面の笑みで金貨の山を取り出す。ロンが何回目かも分からない驚愕の表情を晒し、感嘆の声を漏らしていた。

しかし俺はロンには目もくれず、ハリーの肩をバッシバッシと叩いた。

「ギャッハハハハッ！その豪快さ気に入ったぜハリー！俺にも半分出させやがれ！」

ポケットの金貨を掴み、ハリーの手に追加する様にジャララララっと落として大笑いした。

その時のロンの顔を、写真に収めることが出来なかったのが残念でならなかった。

「生きてて良かった……！」

「泣くな泣くなロン、ほら口開けろ」

「いや、どさくさに紛れて百味ビーンズを箱ごと口に詰めようとしないでよ」

「大鍋ケーキ美味しいよ！レネも食べなよ！」

「鍋の形をしたケーキか……凝ってんなぁ」

大量の菓子に囲まれてじんわり涙目のロンに、初めて見る菓子に目を輝かせる俺とハリー。まるでパーティー会場の様な光景だった。

あ、ハリーが開けたカエルのチョコが逃げた。チョコで出来たカエルとかすげえ技術。
「逃げちゃった……」
「そりゃカエルだもん、逃げるよ」
そう言ってロンが開けたカエルチョコも俺の顔目掛けて飛んで逃げてきた。落ち着いて口を開き、キャッチする。そのまま噛み潰してみると、ぶよぶよのチョコにチョコソースが入っていて中々に食いごたえがある。
「あ！僕のチョコレート！」
「逃がすのが悪いんだよ！そらお返しだ！」
新しいカエルチョコを手に取りロンに目掛けて勢いよく開封、ロンの顔にべちゃりと張り付き俺とハリーは大爆笑した。
「あむ、あむ……もう、酷いや！」
「キ、キヒヒ……あーやべ、笑い死ぬ」
「本当に面白いねこっちの世界のお菓子、買って良かったよ」
菓子も一通り食べ終わり、残った菓子をどうしようか悩んでいた。そこに、コンパートメントに顔を出した男がいた。
「あ、あの……」
「ああん？」
「ひっ！」
ギラリと目を向けて見やると、これまた気弱そうなお坊っちゃんが後ずさりしていた。恐怖の表情を浮かべて口をパクパクさせている。
「どうした、何か用か？」
「あ、あのその、えっと、あの」
「心配しないで、見た目ほど怖くないよ」
ハリーがそう言って微笑む、つまり俺は見た目は怖いんだろう。まあ顔隠れてる時点で第一印象としてはそんなもんか。
とりあえず大鍋ケーキをひとつ、お坊ちゃんの口に詰めてやった。
「ホレ、食って落ち着け」
「ちょっとレネ、強引すぎるよ」
「大体何か食ったら落ち着くもんだ」

目を白黒させながら男は何とか口の中のケーキを咀嚼し、なんとか落ち着いた様だ。
と、男の背後に何かが居る事に気が付く。
「なんだありゃ、またチョコが逃げたか？」
「いや違うよ、誰かのペットのヒキガエルが逃げたんじゃないかな」
目を凝らすと成る程、色も違うしそもそもデカイ。しかしペットにヒキガエルとかどうなんだとは思わざるを得なかった。次の瞬間、ケーキを食べ終えた男は凄い勢いで振り返った。
「トレバー！」
大急ぎでカエルを抱えあげた男はそのカエルの頭に頬擦りした。
「ああ良かった、急に居なくなるなんて！」
そうして自分の世界へと入り込み、男はコンパートメントから出ていった。
「……結局なんだったんだあのヤロウ」
「さあ……？あのヒキガエルを探していたんじゃないかな？」
「きっとそうだよ、見つかって良かったね」
笑って男が出ていった方を見続けるハリー、ロンは俺に顔を合わせて苦笑いしている。
そうこうしている内に、誰かの声が車両中に響き渡った。
「そろそろ到着するぞ！」
ハリーとロンはお互い慌て出す。荷物の多さもさることながら、これだけの菓子があると片付けるのも時間が掛かるだろう。
「ど、どうしよう！」
「まだ食べてないのも多いよ！」
「あー……ハリー、半分持て。残った分は俺が持ってってやるよ」
「あーうん、そうだね」
ハリーは空いた鞄に菓子を詰めていく。そうして持ちきれなくなった所で残りは俺の内ポケットに全部詰めた。
ロンは自分の荷物とハリーの荷物を整理している。俺は先に出ておくとするか。
「んじゃあなお前ら、どうせ後で会うだろうが中々面白かったぜ……

特にロンの顔が」
「ほっといてよ！」
「あはは……またね、レネ」
そう言って鳥かごを持ち、程無くして列車が止まったので外に一番乗りで飛び出した。
外には荷物を回収する人員が居た、恐らくホグワーツまで荷物を届けてくれるのだろう。
「フクロウをお預かりします……荷物はこれだけですか？」
「心配すんな、教科書も道具も全部ある」
「分かりました、お名前は？」
「レネ・ショーペンハウアーだ」
「承りました……良い学園生活を」
そうして誰よりも先に荷物が無くなった俺は、ある男の前に案内される。デカイ、そしてなんというか……狩人っぽい男だった。
「お前はイッチ年生か？」
「ああそうだぜ、アンタも先生なのか？」
「いいや、俺は只の案内人だよ」
寄ってみるが明らかにデカイ、人間とは思えない程にはデカイ。とはいえグリンゴッツ銀行の奴等に比べれば明らかにコイツの方が人間っぽい見た目をしていた。
と、隣に誰かが来たのに気が付き、チラリとそちらを見てみると……
「よぉ、また会ったな」
「……ハァイ」
1ヶ月前に……あー……フラットなんちゃらって奴に連れられてた女が心底嫌そうな顔をして隣に立っていた。
「ケッケッケ、そんな嫌そうな顔をするんじゃねぇよ。これから同じ新入生だろうが」
「あまり品の無い男とは関わりたくないの」
「おや手厳しいお嬢様だ、女心は分からんな」
話は終わった、とでも言う様に女は本を開いて読書に熱中し始め

た。覗いて見ると魔法薬の本らしいが……どこか、見覚えのある本だ。
「<多種多様な魔法薬>か、そりゃあ」
「！」
　女は驚いてこっちを向く、俺の手には少しヨレヨレになってしまっている同じ本がある。
「中々に面白えよな。本当は学校での暇潰しにと思って買ったんだが、結局入学する迄に全部読んじまったぜ」
　クククと笑いながらページをパラパラ捲ってみると、元気爆発薬のページが開いた。
「この二角獣の角ってのが分からねえ、一角獣ならユニコーンだろうがな」
「……二角獣はバイコーンよ。驚いたわ、貴方って本を読む趣味があるのね」
「ああ、普通の勉強ならこうはならなかっただろうが魔法の勉強ってなれば興味は尽きねえ。それにしてもバイコーンか……こりゃあホグワーツの図書館に力を借りるべきだろうな」
　こうして女との会話が続いた、内容はほぼ魔法と魔法薬に関する事だ。他の新入生が集まって出発しようとも止まらない。
「私はこのブボチューバーの膿っていうのが何なのか分からないの。魔法生物かしら？」
「そりゃ植物だ、毒があるが大抵の皮膚薬に使うって確か３００ページ辺りに書いてあるぜ」
「……本当ね、３０２ページだったわ」
「因みに実物もあるぜ、ホレ」
「うわ……気持ち悪い見た目ね……って何でそんなもの持ってるの？」
「買ったんだよ、ダイアゴン横丁で買えるモンは大体買ったぜ。あー早く魔法薬作りてぇ」
「見た目に似合わず熱心ね、良いことだわ」
「似合わずは余計だ、似合わずは。ヒヒヒ」

そうして魔法薬サミットを開いている内に、後ろから声が上がった。
「なんだなんだ？」
「見て、あれ！」
女は前を指差す、そこには……城があった。
うん城だ、どっからどう見たって城だ。案内人の大男は振り向いて叫んだ。
「全員ボートに乗れぇい！」
目の前には湖、そして繋がれたボートがある。そしてその先はあの城だ。つまり……ホグワーツは城になった？違う、城だった。いかんいかん、混乱してきている。
「よっと……ホレ、捕まれよ」
「いいわよ、自分で乗るわ」
そうして女は同じボートに乗った。もう2人ボートに乗り込み、ボートは動き出した。
「名前を言ってなかったわね、私はハーマイオニー・グレンジャーよ」
「レネ・ショーペンハウアーだ……流石に何度も自己紹介するのは面倒だな」
「1人1回だからいいじゃない」
それからは再び魔法薬の話題に花が咲いた……同乗者が少しうんざりしているようにも見えたが気にはしない、魔法も良いが魔法薬は材料を見ているだけでも楽しいものなのだ。
ちなみに、頭の中でハーマイオニーって並び替えたらオーマイハニーになるな、とか下らない事も考えていた。

別れるのは寮だけではない

「マクゴナガル教授、イッチ年生の皆さんです」
「ご苦労様ハグリッド、ここからは私が引き受けます」
恐ろしくデカイ建物だ。やはり近くても城にしか見えない……むしろ城を学校にしたのか。
そうして門の入り口を見るとマクゴナガルが居るのが見えたので手を振ると、凄くビミョーな表情を浮かべていた。
その心中は『問題児が来てしまったか』、といった所だろうか。ケケケ。
「ホグワーツ入学おめでとう。新入生の歓迎会がまもなく始まりますが……大広間の席に着く前に、みなさんが入る寮を決めなくてはなりません」
入る寮だと？そんなもん先に決めておくモンじゃあないのか？といった疑問をぶつける前にマクゴナガルは続けた。
「寮の組み分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室でも寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことになります。寮は４つあります。グリフィンドール、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があって、偉大な魔女や魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんの良い行いは、自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則に違反した時は寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、皆さん一人一人が寮にとって誇りとなるよう望みます」
凄まじく長かったが分かった、４つある寮に振り分ける為の儀式があるという事だ。それなら先に決めておかなかった理由も分かる。
「まもなく全校列席の前で組み分けの儀式が始まります。待っている間、できるだけ身なりを整えておきなさい。学校側の準備ができたら戻ってきますから、静かに待っていてください」
そう言い残してマクゴナガルは去っていき、それを見届けたハーマ

イオニーは口を開いた。
「どうやって組分けされるのかしら？」
　至極全うな疑問だ。儀式と言うからにはある程度格式張った物を想像するが……
「ま、適性テストみたいなモンがあるんだろ。そうでなきゃあ脳ミソ覗かれて適性チェックとかするんじゃねえか？」
「……ゾッとするわね」
　俺の声が聞こえた新入生は体を固めて緊張している様だ。ハーマイオニーは少し表情筋が痙攣していて面白い顔で何か呪詛みたいな物を早口で唱えていて愉快な事になっている。
　そうして数分、なんかゴーストが通りかかったりしているのを物珍しそうに眺めていたらマクゴナガルが戻ってきた。
「さあ、一列になって、ついてきてください」
　そう言われて列になってついていく、ちなみに俺の後ろがハーマイオニーだ。
　大広間に辿り着くと非常に広大な広間に浮かぶ蝋燭、更に上には星空が広がり不思議な光景が広がっていた。
「本当の空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ」
「ほーん……ホグワーツスゲーな……」
　こんな魔法が出来るなら、家での生活も更に快適になるだろうか？などと考えながら上を向いてぼんやりしていると、突然歌が聞こえてきた。
　歌が聞こえる方を見てみると、くたびれた帽子が何か動いている……いや、帽子が歌っているという事が分かった。突発的だったので聞いてなかったが、あるフレーズが頭のなかに残った。
　グリフィンドールに行くならば
　勇気ある者が住まう寮
　勇猛果敢な騎士道で
　他とは違うグリフィンドール
　ハッフルパフに行くならば

君は正しく忠実で
忍耐強く真実で
苦労を苦労と思わない
古き賢きレイブンクロー
君に意欲があるならば
機知と学びの友人を
ここで必ず得るだろう
スリザリンではもしかして
君はまことの友を得る
どんな手段を使っても
目的遂げる狡猾さ
恐らくこれこそが、振り分けられる４つの寮の特徴だという事が分かった。
「アボット・ハンナ！」
自分で色々と考えている内に、誰かの名前が呼ばれた。恐らくその名前の女は椅子に座り、歌っていた帽子を被る。
「ハッフルパフ！」
帽子は叫び、歓声の上がる机に向かってハンナが歩き出す。成る程、被れば勝手に帽子が判別してくれるというのか。
「グレンジャー・ハーマイオニー！」
「……行ってくるわね」
数名の振り分けの後、ハーマイオニーが呼ばれて俺に声を掛けて帽子に向かう。
まああの勉強大好き娘の事だ、選ばれる寮は間違いなくレイブ――
「グリフィンドール！」
……ズッコケなかった俺を誰か誉めやがれ。
当の本人は嬉しそうにグリフィンドールの机へと向かっていった。
しかしさっきから在校生の視線を感じる。それも複数、俺の事を奇怪に思っているのだろう。
「ウィーズリー・ロナウド！」
呼ばれて帽子を手に取ったのはロンだ、随分ビビっているが……大

丈夫かアイツ。
「うはあ！」
「ウワァ！」
「またウィーズリー家の子だな。君はもう、決まっておる。グリフィンドール！」
「……ふぅ……」
またもやグリフィンドールだ、俺はロンのコロコロ変わる表情を見てゲラゲラ笑った。
「ポッター・ハリー！」
暫くすると、ハリーの番が回ってきた。列車に居た時とは別人の様に暗い顔をしている。
それとは別にざわつく在校生。今の今までこんな事は無かった事を考えると、やはりハリーの知名度は相当な物なのか。
ハリーはゆっくりと帽子を被った。
「んん、難しい、こいつは難しい。勇気に溢れておる。頭も悪くない。才能もある。そして、自分の力を発揮したいと願っておる。さてどこに入れたものか」
「スリザリンはダメ。スリザリンはダメ」
「おぉ、スリザリンは嫌なのか。いいのかね？君は偉大になれる。その素質は十分に備わっておる。スリザリンに入れば、間違いなく偉大になる者への道が開けるのだが、嫌かね？」
「お願い、どうか、スリザリンじゃないところにして。スリザリンだけは！」
帽子にそう願う、というよりは神頼みに近くなってないか？ハリーよ。
帽子は納得した様に唸った。
「それでも嫌と言うなら……それならば、グリフィンドール！」
その瞬間、グリフィンドールの机から大歓声が上がった。割れるような拍手に抱き合う男達までいる始末だ。
それとは対照的なのがスリザリン、いやーな雰囲気を漂わせている。呪いでも掛けそうな……いや、呪いを掛けている様な状態だ。

「ショーペンハウアー・レネ!」
俺の番が来た、両手をポケットに突っ込みながら帽子の元へ向かう。先生方がめっちゃ見ている、クソ親父を知っているからか。在校生の方はというと静かだった、俺を注目して物音1つ立てなかった。
余談ではあるが、俺の組分け先はハリーとロンの予想はグリフィンドール、ハーマイオニーはレイブンクロー、そしてマクゴナガルと他の生徒達は全員スリザリンの予想を立てていた様だ。
帽子を右手で取り、左手でフードを取って広間を向くと悲鳴が上がった。
銀髪のオールバックにギラリと光るギザッ歯、紅い眼と色白な肌は吸血鬼を想起させる。
恐怖する生徒に向けてクックックと邪悪な笑みを撒き散らし、ドカリと椅子に座って帽子を被った。
「スリ……いや、これは……フム、狡猾ではあるがそれは楽しむ為、非常に学ぶ意欲が高く交友関係も築く気が大いにある。友人はグリフィンドールに行ったが……」
「……」
「これは難しい、先程と同じ、いや、それ以上とも考えられる。4つの寮全てに適性があると言えよう……フム、フム、どうだ、君はどの寮に行きたいか希望はあるかね?」
足を組んでふんぞり返る。
「別にねぇな、しいて言うなら面白え奴等が居る所に入りてえ位だ」
「ほう、君の面白い生徒の基準は様々だが……少なくともハッフルパフではあるまい。レイブンクローも長い目で見れば違うと言えよう」
重厚な声が大広間に響き渡る。ハッフルパフとレイブンクローの机から肩の力が抜ける様に溜め息をつく声が聞こえた。
「勇気はある、しかし偉大な魔法使いになることを望んでおるな?であるなら……」
どうやら決まった様だ、帽子は息を大きく吸い込む様な動作をした後……
「スリザリン!」

大きな声が広間に響き渡った。歓声はなく、スリザリンの机からまばらな拍手が聞こえるのみ。それとは別に後ろから大きな拍手が聞こえた。一番偉そうなおっさんが大きな拍手をしていた。
帽子を脱ぎ、フードを被ってスリザリンの机へと向かう。その最中グリフィンドールの方を見てみると、ハリーとハーマイオニーが残念そうな顔をしている。ロンはこれまた複雑そうな面持ちで下を向いている。
「ケケケ、ま、それもいいだろ」
スリザリンの空いた椅子に着席する。隣には金髪の俺と同じ新入生が居た。
「君は……純血か？」
「純血？なんだそりゃあ？」
「魔法使いの家系か、という事だよ。その格好はとてもマグル生まれとは思えないけど」
俺は椅子を引かず、ふんぞり返って答える。
「少なくともクソ親父は魔法使いだ、俺は顔も知らんがね。おふくろも多分そうだな」
わざわざクソ親父の悪巧みに付き合う辺り、おふくろも魔法使い……いや、きっとホグワーツ卒業生の魔女だったのだろう。
男は満足そうに頷いた。
「それなら良いんだ、宜しくレネ」
「あー……ドラコだったか？まぁ宜しくな」
なんとなく覚えていた、コイツは帽子を被る寸前に「スリザリン！」と帽子が叫んだのが印象的だったので頭の片隅に残っていたのだ。
「なんだ、思ったより普通に話せるのね。心配して損したわ」
「アンタは……誰だったか？」
「ダフネ・グリーングラスよ、まあ新入生も多いから全員は覚えきれないわよね」
「ああダフネか、わりぃわりぃ」
金髪で長髪の女がダフネ、正面に座っていた。
「おめでとう！ホグワーツの新入生、おめでとう！歓迎会を始める前

に、二言、三言、言わせていただきたい！」
　そうして話している間に組分けの儀式が終わった様で、偉そうなおっさんが立ち上がって大声を出していた。
「では、いきますぞ。そーれ！わっしょい！こらしょい！どっこいしょい！以上！」
　思わずコケそうになる。が、それよりも目の前に恐ろしい光景が広がっている。
　肉だ、こんがり焼かれた七面鳥にスペアリブ、ラムチョップに至るまでがところ狭しと並んでいた。肉料理以外もあったが俺には肉以外眼中には無い。
「これは凄い……家でもここまで豪勢な料理は中々無かったな」
「見てるだけで胸焼けしそうだわ……」
「ヒャッハー！肉だぜぇ！」
　ドラコとダフネが尻込みしている中、俺は七面鳥を引きちぎりスペアリブをおかずにラムチョップを平らげ、２人が唖然としている間に次々と胃の中に放り込んでいった。
「うめぇ、滅茶苦茶うめぇぞコレ！ドラコも食ってみろよ！スペアリブがマジでうめぇぞ！」
「あ、うん」
「じゃ、じゃあ私も……」
　控え目に飯を頬張る２人に遠慮せず、俺は肉食獣と化して片っ端から肉をかっさらう。
　そうして数分後、腹を満たして落ち着いた俺は、デザートを前にジュースを飲んでいた。
「ックー、満足だぜ」
「僕ももうお腹一杯だ」
「デザートは別腹よ」
　ジュースを飲んでいる俺とドラコはドーナツとケーキを取り皿に取り分けるダフネをヤレヤレといった様子で眺めていた。
　素晴らしい飯だ、魔法の為とは言ったがこの飯の為だけでも通う価値がある。

「そういえばレネって勘当されたのか？」
「あん？」
　ドラコの突然の問いに疑問符を付けて返す。
「父親の顔を知らないんだろう？母親と一緒に逃げたとか、そういう事じゃないのか？」
「あぁ、別にそういう事じゃねぇよ。親父は俺が顔を覚えねぇ内にどっかで放浪してんだよ。しかもおふくろは４年前に失踪したきりで俺も行方は分からねぇな」
「４年前に失踪……まさか、君の母親はトルーディ・モルドナ＝シュミット？」
「んあ？知ってんのか？」
　ドラコは驚いた顔で話し続ける。
「父がホグワーツでスリザリンに居た頃の旧友と聞いたんだ。聡明な女性だったけど失踪したと聞いて探し回っていたんだ、随分前に捜索は打ち切っちゃったらしいけど……」
「そんじゃあおふくろは多分スリザリン出身なんだな、通りで組分けの時に教師から熱烈な視線を受けている訳だぜ」
「僕も別姓だったから気付かなかったよ」
　意外な所で情報を入手した。どうやらおふくろはスリザリン出身らしい。ま、魔法使いに見付けられないなら向こうの世界で見付かる確率もかなり低い物だろう。
　そうして歓迎会は終わり、幾つか注意点がおっさんから発せられていた。森に入らない事、廊下で魔法を使用しない事、クディッチについてのお知らせ……クディッチってなんだ？また後でドラコにでも聞いておこう。そして最後に、とても痛い死に方をしたくない奴は、四階右側の廊下に入らないようにする事。入ったら死ぬ廊下がある学校とは、と突っ込みを入れたくなったが。その後の校歌の歌詞が余りにも＜アレ＞だったので頭の中から吹っ飛んでいた。
「ふぅ……流石に疲れた、眠いぜ」
「僕もだ……まだ着かないのかな」
　そうして俺達は監督生のジェマ・ファーレイとかいう女に連れら

れて廊下を歩いている。割りと全員ぐったりしている様に見える。
「着いたわよ、2週間で変わる合言葉で入り口が開くわ。今の合言葉は『偉大なる指導者』よ。覚えておいてね」
ジェマがそう言い終わると無骨な岩壁がどんどん広がり、人が通るには十分な大きさの入り口が出来上がっていた。
「面白え、合言葉か」
「クラッブとゴイルが忘れなければいいけど……まあ、僕には関係ないか」
中は石造りのひんやりした広間になっている。ここが所謂談話室で男子と女子で部屋が別れている。荷物は既に振り分けた部屋に運び込まれているという事が知らされた。
「明日の授業の時間割をしっかりと確認しておいてね。遅刻して減点、寮杯が取れなくなって責められても文句は言えないわよ」
「マクゴナガルも言ってたが、寮杯って結局なんなんだ？」
「寮対抗のポイント勝負さ。一番優秀な寮を争うんだけど、スリザリンは何年も連続で寮杯を獲得しているんだよ」
ドラコはそう言ってふんぞり返る。コイツはなんともガキ大将という様な性格をしている。
ジェマは離れていき、俺達は談話室を軽く眺めてから急いで寝室へと向かっていった。

煽り立てて魔法薬

「やあ、おはよう」
「おう、眠れたか？」
「ボチボチね、クラッブとゴイルのいびきも気にならない程にはよく寝たよ」
「キシシ、そうかよ」
　寝室は俺とドラコ、そしてクラッブとゴイルが同じになっていた。俺は一足先に起きてガリオン金貨でコイントスしながら読書をしており、後からドラコが起きてきた。クラッブとゴイルはまだいびきをかいて眠っている。
　因みにクラッブとゴイルはドラコの子分の様で、ドラコにずっとついて回っていたが特に俺は気にしていなかった。
「シャワー浴びてこいよ、そろそろ準備しねえと朝飯食いっぱぐれるぜ」
「ああ、そうするさ」
　そうしてドラコは子分を起こしに掛かる。それを見届けて俺は談話室へと向かった。

「このクラスでは杖を振り回すような馬鹿げた事はやらん。そこでこれでも魔法かと思う諸君が多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中を這い巡る液体の繊細な力。心を惑わせ感覚を狂わせる魔力」
　偶然にも、初めての授業はグリフィンドールとの合同で一番興味がある魔法薬学だった。教師のスネイプはゆっくりと生徒達の間を歩いている。
「諸君がこの見事さを真に理解するとは期待しておらん。我輩が教えるのは名声を瓶詰めにし栄光を醸造し死にさえ蓋をする方法である。ただし我輩がこれまでに教えて来たウスノロたちより諸君がまだましであればの話だが」

感じの悪い教師だ、しかし魔法薬に関しては詳しそうだ……勿論、その胡散臭い見た目と怪しい薬のイメージがマッチしたからだが。
「ポッター！」
急に指名され、体をびくりと震わせるハリー。
「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じた物を加えると何になるか？」
ハリーは苦々しい表情を浮かべ、口を開く。
「……わかりません」
「チッチッチ――有名なだけではどうにもならんらしい」
ハーマイオニーが手を上げているが、明らかに無視されている。どうやらスネイプはグリフィンドールを明らかに敵視しているらしい。隣でドラコが何故かクスクスと笑っている。
「――ほう」
代わりに俺が手を上げると生徒達はざわめき、スネイプは僅かに眉を上げて声を発した。
「ショーペンハウアー、分かるのかね？」
「アスフォデルの球根と粉末と煎じたニガヨモギは更にカノコソウの根と催眠豆の汁を使えば＜生ける屍の水薬＞っつう強力な睡眠薬になる。ついでにアスフォデルの球根の粉末は＜生ける屍の水薬＞に対する解毒剤にも使用される、一種のユリの球根だ」
そう言い切ると僅かに目を見開いたスネイプ。しかし、またハリーに向き直った。
「ポッターにもう1つ聞こう。ベゾアール石を見つけて来いと言われたらどこを探すかね？」
「わかりません」
「クラスに来る前に教科書を開いてみようとは思わなかったわけだな。ポッター、え？」
どちらかといえばグリフィンドールよりもハリー自身を嫌っている節があるスネイプは、ちらりとこちらを向いたので手を再び上げた。
「ベゾアール石はヤギの胃から採取できる石。正確にはヤギの胃で長

時間掛けて塩分や草の栄養分やらの成分が凝縮して出来る胃石だな、どのヤギからも取れる訳じゃねえから貴重なシロモノだ。さっきの＜生ける屍の水薬＞も含めて色々な解毒剤に使用されるってな」
そう言ってポケットからベゾアール石の入った小瓶を取り出し、右手で弄くり回す。
ベゾアールという種のヤギが命名の元、というこの石は俺には茶色くて汚ならしい石にしか見えないのだが。
「ふむ……ポッター、モンクスフードとウルフベーンとの違いは何だね？」
「分かりません」
「……モンクスフードとウルフベーンはどっちもトリカブト……いや、こっちじゃアコナイトと言うのが一般的か。これまた基本的には水と栄養素を吸った塊根を乾燥した物を使うな」
ハリーの方を見ず、スネイプは俺を見続けていたので手を上げずに答える。すると、スネイプは表情を変えずに頷いた。
「態度は最悪だが只の木偶の坊ではない様だ。スリザリンに5点与える」
そう言ってスネイプは踵を返す、俺の回りにはポカンと口を開けている生徒が何人も居た。勿論、ドラコもその1人だった。
「レネって勉強出来たんだ……」
「どういう意味だよ、そりゃあ」
「い、いいや、他意は無いよ」
俺は薄く笑みを浮かべ、スネイプの授業を真剣に聞き入る体勢に入る。
スネイプは俺達に向き直って言った。
「さて、始めに諸君らが取り掛かる最初の魔法薬は＜おできを治す薬＞だ。３８ページを開き各自用意した鍋を使用して取り掛かりたまえ」
＜おできを治す薬＞、最初の魔法薬としては少々危ねえシロモノではなかっただろうか。それこそミスれば鍋すらオシャカにしてしまう程の。

特に起こしやすいミスを思い出しながら教科書を見ずに用意された蛇の牙を取り、よくすりつぶして計量後に鍋へ投入。高温で１０秒キッカリ熱した後醸造する――

「よく教科書も見ずに出来るね」

「へっ、ミスさえ注意すりゃあそんな難しいモンじゃあねえよ」

俺とペアのドラコにそう言い、醸造の待ち時間で周りを見ると漸く蛇の牙を取り始める生徒達が溢れかえっていた。

「まあ、この薬は任せてくれや」

「分かったよ、じゃあ僕はグリフィンドールの間抜け面でも眺めて暇を潰すさ」

「いや実技見て勉強しろよ」

まだまだ待ち時間はある、ドラコの開いたままの＜おできを治す薬＞のページを目にやる。

「ん？ありゃ？」

「どうしたんだい？間違えたのか？」

教科書を見てみると、ある一点に違和感がある事に気が付いた。ヤマアラシの針を入れた後に鍋をかき混ぜるのだが、そのかき混ぜ方が書いていない。魔法薬は製造段階でよく混ざらないと効能が落ち、混ぜすぎると空気と反応しダメになる物もあるのだ。

「……ケケケ、意地の悪い教師だぜ」

「ん？どういう事だい？」

スネイプの顔を見てみるが、こちらの声は聞こえていた筈なのに知らん顔をしている。どうやら教科書に不備がある事を知っている様だ。

醸造を終え、角ナメクジを入れた後に火から鍋を下ろす。ヤマアラシの針を２本加え、おたまをゆっくりと鍋の中に入れた。

「……１……２……３……４……５……」

「随分そこは慎重にやるんだね」

「まぁな……」

時計回りに内側から外側へ５回かき混ぜ、慎重におたまを抜いて直ぐ様杖を取り出す。

「いくぜ……ほっ」
「……」
俺は鍋に向けて杖を振り、なんだかんだ言いつつ俺の作業をじいっと見ていたドラコは息を呑んで鍋を見つめる。すると……
「……何か変な煙出てないか？まさか爆発とかしないだろうね？」
「何言ってんだバカヤロウ、教科書を見ろ」
鍋からはピンクの煙が立ち、粗熱の取れた<おできを治す薬>が出来上がっていた。流石に初めての魔法薬ともなると喜びもひとしおだ。
取り敢えずもっと冷めるまでは瓶詰めが出来ないので周りを見ると、ちらほらと醸造が終わり角ナメクジを入れる生徒が現れた所だった。
「キシシ……楽しみだなぁ」
「……？」
ジロジロと他の生徒を集中して眺め、杖を手にしながら含み笑いを漏らす。その間スネイプは俺の鍋を確認し、何やら頷いていた。
しかしその瞬間、俺はある男に杖を向けた。
「フリペンドッ！」
バシッ！っと音を立てて男はヤマアラシの針を地面に落とす。教室中の生徒が驚愕し、スネイプが顔を怒りに滲ませて俺を見た。
「大馬鹿者！何をしているッ！」
俺は隣で憤慨するスネイプを無視し、笑って両手を大きく広げ魔法を受けた男に歩み寄る。
「いーっけない子だなぁネビル君！ヤマアラシの針は鍋を火から外して入れないとなぁ！」
「……何だと？」
スネイプはネビルの鍋を確認する。その間にも俺は大手を振って喋り続けた。
「あのまま針を入れていたら鍋をブッ壊して中身が飛散、教室や他の奴等、そもそもネビル君がおできまみれになってタ・イ・ヘ・ンな事になってたぜ？よーく気を付けてくれよ？」

「え……え？」
　ネビル・ロングボトムはポカンと口を開けて俺を見つめていた。鍋を確認したスネイプは無表情に戻って口を開いた。
「よく気が付いたものだ、未然に防いだのでレネ・ショーペンハウアーに１０点。ネビル・ロングボトム、貴様は１０点減点だ、反省するがいい」
「まーまースネイプ先生、未遂だからいいじゃあないですか！許してあげましょうよ！」
「……よかろう、減点は取り消す。但しロングボトムには反省文を書かせる。羊皮紙２枚に纏め来週月曜日迄に提出する様に」
　そう言ってスネイプは元の位置へ戻り、スリザリン生達はクスクスと笑った。
「やるなぁレネ、痛快過ぎてスカッとするよ」
「なぁに、丁度覚えた魔法を実践で使うタイミングを探していただけさ」
　結局、薬を作ることに成功したのは俺とハーマイオニーの居るペアだけだった。それにも関わらず、ハーマイオニーは授業が終わるまで苦い表情を浮かべていた。

「頼みがある」
　授業終了後、そそくさと部屋を後にする他の生徒達を尻目に、俺はスネイプに話し掛ける。
「……先程も言ったが貴様は態度が悪い、減点されたいのか？」
「そりゃあすまねえ。だが敬語なんて煽りにしか使ったことが無くてな、誠意がねぇから先生にも使わない方がいいと思ってな」
　スネイプは目頭を押さえ、ふぅ、と大きく溜め息を吐いて俺を見た。
「……用件はなんだ」
「なあに簡単な話だ、薬を作る練習をしたいから１人で魔法薬を作る許可をくれ。勿論材料は自分で全部用意するからよ」
　スネイプは口元に手を当てて唸り、聞き取りづらい小声を発する。
「……貴様は１人生だ。場数を踏んでいるならまだしも今日初めて魔

法薬を作った素人に許可を出すわけにはいかん」
「そう言わずにどうにかしてくれよ先生サマ。とにかく色々と作ってみたいんだよ」
「……分かった、条件を出そう」
スネイプは俺に面倒そうな顔を向けて言った。
「ウィゲンウェルド薬、忘れ薬、強化薬。この3つを我輩の前で教科書を見ずに完璧に作り上げたまえ。空いた時間にテストをしてやろう」
ウィゲンウェルド薬、ウィゲン樹の樹液を元に出来る薬で、傷薬としてはまあまあだが特筆すべきはその即効性、小さな擦り傷切り傷程度なら使った瞬間に傷が消えてなくなる薬だ。
忘れ薬、これはこっちじゃポピュラーな物らしいが作り方次第で物事を忘れる期間が前後する繊細な魔法薬だ。
そして強化薬、その名の通り身体を強化する薬だが1年生が手を出す様な薬ではない。何せ作った後に1ヶ月間熟成しなきゃあならんのだ。
「オーケー、忘れ薬の効能は3時間前と強化薬のテストは最後で熟成を始めたら許可をくれ。それくらいならいいだろう?」
「忘れ薬の効能までコントロールする気か?」
「テスト、なんだろ?そんくらいやってやるさ……ケヒヒヒヒッ!」
数日後にテストを行うとの約束を交わし、俺も魔法薬の教室を高笑いしながら出ていった。
次は確か、妖精の呪文学とかいう授業だ。

こうしてレネが教室を出る数分前、大股で歩くハーマイオニーとその後ろをついていくハリー、ロンが廊下で話し込んでいた。
「何よアイツ!完全に私達を笑い物に仕立てあげて弄んで!ちょっとでも気を許した私がバカみたいじゃない!」
ハーマイオニーは大いに怒り、廊下をズンズンと踏み鳴らして歩いている。
「でもレネのお陰で僕とネビルは減点されずに済んだんだよ、彼は助

けてくれたんだ」
「うーん……」
反論したのはハリーだった。因みにロンはどちらの言い分が正しいのか分からないので腕を組んで唸っている。
「でもネビルは反省文を書かされる羽目になっているのよ!?彼が可哀想よ!」
「いいや、スネイプの様子からするとレネが止めなければネビルは本当におできまみれになっていたのかもしれないよ」
「それはそうなんだけど……態度がね」
ロンはレネの態度を思い出す。明らかにネビルを小バカにしており、わざとらしい身振り手振りは見事なまでに腹立たしかった。
「兎に角アイツを許す気は無いわ。もし貴方達がレネを擁護するなら容赦はしないから!」
「勘弁してよハーマイオニー、同じ寮生で争う事はないじゃないか……」
そんな項垂れたロンの言葉に返答せず、ハーマイオニーは次の教室へと向かっていった。
「ハリー、どうする?」
「……うん、あんまり機嫌を逆撫でしたくはないからハーマイオニーに全面的に合わせよう。多分レネなら多少暴言を吐かれた位で気にはしないだろうしね」
「うーん、確かにそれが無難かなあ」
こうしてロンとハリーもハーマイオニーの後を追って小走りで変身学の教室へと向かった。

ちょっとした応用

数日後、はたと廊下を歩いていた生徒達の動きが止まる。一団はグリフィンドールの生徒達の物、そしてもう一団はスリザリンの生徒達の物であった。

グリフィンドールの生徒の数人がイタズラっぽい笑みを浮かべて言い放った。

「おやおや、誰かと思えば良いトコのお坊ちゃん達のお出ましだ！」

「ズルして調子に乗るのも今年までだぜ！俺達には今年はポッターが居るんだからな！」

その一言でスリザリン生達の表情が変わった。元々プライドの高い生徒達はコケにされる事は我慢ならないのだ。一触即発の雰囲気。

「この……！」

「まーまーまーまー」

たまたま近くを通り掛かっていた俺はスリザリンの先輩達を諌め、グリフィンドールの年上達の前へと躍り出る。回りにはハッフルパフやレイブンクローの生徒達が事の成り行きを見守っていた。

俺は大口を開けてオーバーな身振り手振りをしながらわざとらしく大声を張り上げた。

「おやおやぁ！グリフィンドールの先輩方達はまだ1年生のポッターに頼るしか勝ち目が無いなんて！いやあ見ていて悲しくなりますねぇ先輩方！さあさあグリフィンドールの生徒達なんて放っておいて次の授業に行きましょうよ！」

一瞬、いつも話し声が絶えない廊下がシン……と静まり返り、すぐにスリザリンの先輩達は大爆笑。対してグリフィンドールの生徒達はワナワナと肩を震わせて顔を真っ赤にしている。

「ふざけるなよ……！」

「やめろ、コーマック！」

ギラリと目を向けると、コーマックと呼ばれたグリフィンドール生が怒り狂ってローブから杖を抜いて俺の方へと向けようとしている。

口元を歪めて静かに笑う。

「リクタ――」
「インペディメンタッ!!」
呪文を使おうとしたコーマックに対し、即座に反応して杖を袖から抜き呪文を掛ける。コーマックは体を硬直させて口をパクパクしている。
妨害の魔法、長くは持たない。
「リクタスセンプラッ!」
即座に次の呪文を掛ける。これは所謂くすぐり呪文と呼ばれ、全身をくすぐられるような感覚に耐えられず、一定時間転げ回る事になるらしい。というかコーマックは現にのたうち回っている。
「何をしているのかね?!」
小さな人物が廊下を駆けてやって来た。フリットウィックだ、ナリは小さいがコイツは中々凄腕の教師だと知っている。
「呪文を掛けたのは君かね!?」
「嫌だなあ、正当防衛ですよ先生」
「いや、悪いのは、そいつだ!」
コーマックはむせながらも叫んだ。フリットウィックは少し考え込み、近くに居たレイブンクロー生に体を向けた。
「君は最初から見ていたね?どちらが悪いのか分かるかね?」
「あ、う、見ては、いましたが……」
レイブンクロー生はしどろもどろになりながら口ごもってしまう。フリットウィックは溜め息を吐き、もう一度聞いた。
「順序だてて聞こう。争いの原因は何だね?」
「えっと、言い争いです」
「最初に口を出したのはどちらかね?」
「グリフィンドールです」
びくり、とグリフィンドール生が体を震わせてバツの悪そうな表情を浮かべる。
「あともうひとつ、先に杖を相手に向けたのはどちらかな?」
「……グリフィンドールです」
スリザリン生はほくそ笑み、グリフィンドール生は顔を青くする。

そう、俺は先に手を出さず後から対処していた為疑われるような事は何もしていなかった。
「……他の生徒から反論が出ないということは間違いない様だ……本当はこんな事をしたくはないのだが杖を向けたのなら看過は出来ない。グリフィンドール１０点減点」
「そんな！アイツだって杖を向けたのに！」
　ようやくくすぐり呪文の効果が切れたコーマックが異議を申し立てるが意味はない。
「そもそも君が杖を向けなければレネも向けなかった筈だ、違うかな？」
「それ、は……」
　俺はヒヒヒッと薄ら笑いを浮かべて肯定する。フリットウィックは苦い表情をして俺に言った。
「あまり問題は起こさぬようにな」
「アイサー、先生」
　フリットウィックは肩を落として去っていく。それに続いてグリフィンドール生達も逃げるように廊下を離れ、漸く平穏が訪れた。
「よくやったわ、レネ」
「ああ、組分けの時は只の品のない男だと思っていたが……お前は使えるな」
「なぁーに先輩方の為ならこれ位は……っと、次の授業があるんでこの辺で。ケケケケッ！」
　次の授業は外で初めて箒を使った飛行訓練だ、これまた魔法薬や魔法呪文に匹敵する程興味がある授業だったので遅れたくはない。
　スリザリンの先輩からの称賛を受けながらその場を後にする。

　広い青空の下、グリフィンドールの生徒と合同で箒を下に置いて俺を含めた生徒達は等間隔で立ちながら飛行訓練の教師、マダム・フーチの授業を受けていた。
　それにしても良い天気だ、久々にスケートボードで思いっきり滑りたいぜ。

「右手を箒の上に出して＜上がれ＞と言います。では、箒を掴んだらそれに乗ってご覧なさい。しっかり掴んで。滑り落ちたくないでしょう？」
マダム・フーチの厳しそうな声を聞きながらも俺は他の生徒と同じ様に右手を出す。
「上がれ……フゴッ！」
スコンッと小気味良い音を立てて箒の柄が俺の顔面にクリーンヒットする。勢いよく上がりすぎた様だ。他の生徒はほぼほぼ上がっていないようだったが、一発で成功させていたハリーとドラコが俺を見て笑ってやがる。
「見せモンじゃねえんだぞてめえら……ヘッ」
特に気分は害さず箒に跨がると、フーチがやって来て掴んだ腕の位置を矯正する。箒に跨がるなんざダッセェなぁ等と思いながら飛ぶイメージを膨らませる。
風が気持ちいいだろうと思っていた所で他の生徒達も準備が完了していた。
「私が笛をを吹いたら地面を強く蹴って飛上がってください。箒をしっかり持って、少しの間だけ浮かびます。そしてわずかに前傾し、再び着地しなさい。ではいきますよ……1、2の――」
「うわあああああっ！」
事件は起こった、ネビルがフーチの合図の前に不安定な状態のまま飛んでいく。
「ロングボトム！今すぐ戻りなさい！」
まあ、聞こえちゃいねえだろう。ネビルはガクガク震えながら箒にしがみついている。
俺は箒を地面に置き、箒を踏んで笑った。
「キシシ、チャンスだな……グラーテンツ！」
杖で箒に魔法を掛け、後ろ足で地面を蹴って空へと飛び上がる。すると上手くいった様で俺は箒に立ったまま乗っていた。
「ポッター！ショーペンハウアー！二人とも何をしているのです！」
フーチの声が聞こえて横を見ると、ハリーが箒に跨がり並走してい

た。飛ぶ速度はハリーの方が少し早く、程なくして抜かれてしまう。
と、悲鳴が上がった。ネビルが箒に振り落とされて落下している――
「ウィンガーディアム・レビオーサッ！」
ハリーが間に合わないと悟った俺はネビルに魔法を掛ける。浮遊呪文だが少しだけ落下が遅くなるだけで長くは続かない、苦手な呪文だ。
「――ネビル！」
しかしでき損ないの呪文が功を奏し、ハリーがネビルの腕を掴んだ。しかし2人の体重は学校の備品のボロい箒では耐えきれず、纏めて落下していく。
「う、うわあああっ！」
「ネビル、暴れないで……！」
そのまま地面に激突するかと思われたその時、もう一方の腕を俺が掴む。
「よーくやったぜ、ハリー」
「えっ……レネ……？」
ハリーは俺を見て驚愕の表情を浮かべる。俺は箒の下に足をつけ、下を向いて立っていた。
箒を乗る前に掛けた呪文は接着呪文、一定時間掛けた物を術者の思考次第でくっつけたり離したりを自在に行うことが出来る呪文だ。
「あ、あれ？落ちない？」
「落ち着いたかネビル？危なっかしい奴だぜお前は……イーッヒッヒッヒ」
ゆっくりと高度を下げ、ネビルを地面に下ろしてから俺とハリーも地面に降りる。グリフィンドールの奴らが歓声を上げて走ってきた。
「凄いやハリー！すっごくかっこよかった！」
「い、いや別にそんなこと……」
ロンに詰め寄られてたじろぐハリーを尻目に、俺はスリザリン生が居る方へと歩き出す。
「あ、レネ！」

「……何だ？」
ハリーに呼び止められ、顔だけを向ける。
「あ、あの……ありがとう！」
「……へっ、ガラじゃねえんだ。やめてくれ」
後ろを向きながら腕を上げて返事し、今度こそ歩き始めるとドラコの仏頂面が見えてきた。
「……なんで助けたんだよ、笑いの種になりそうだったのに」
とことんコイツはグリフィンドールが嫌いな様だ……尤も、授業前に見た小競り合いを見ればスリザリンがグリフィンドールを嫌っているのは一目瞭然なのだが。
「なんでってテメェ、落下死でもして授業を止められたくねぇからだよ。俺はこの授業結構楽しみにしてたんだからな」
「……つくづく君は、打算的だね」
「やりてぇ事をやってるだけだ」
ふん、と鼻を鳴らしてドラコに言い放つ。そうこうしている間にフーチが俺に近付いて来た。
「ショーペンハウアー、かなり変わってはいましたが見事な飛行でした……マクゴナガル先生がお呼びしていますので行ってきなさい」
「はぁ？俺は授業が受けたいんだが……」
「いいえ行くべきです。きっと素敵な出来事が待っていますよ」
ちらりと見やると勝手口にマクゴナガルが立っており、ハリーもまた側に居る。まあ、拒否は出来ねえか……と頭を掻いて歩いていく。
「どうしたよ先生、加点でもすんのか？」
「ついてきて下さい」
マクゴナガルは表情を固めたまま校内に向かって歩いていく。ハリーはマクゴナガルの表情を見たからか緊張した面持ちだった。俺はいつかのようにハリーの背中をバッシバッシと叩く。
「シケたツラすんなよハリー、別に俺達は悪いことをしてねぇだろ？」
「……じゃあ、何で僕達が呼ばれたのかな？」
「そりゃあ知らねえよ」
程なくして＜闇の魔術に対する防衛術＞の教室へたどり着いた。

正直言ってクソ下らない授業だったので内容は全然覚えていなかった。
「クィレル先生、すみませんが暫くウッドとフリントをお借りできませんか」
「い、いいいですとも、もちろん！」
ビクビクしながら答えたのはクィレル、この授業を受け持っている教師だ。クィレルが答えるとグリフィンドールとスリザリンの生徒が一人ずつこっちへやって来た。
「ポッター、オリバー・ウッドです……この子は最高のシーカーですよ！」
俺とハリーは目を丸くした。厳格なマクゴナガルがとても嬉しそうに笑っていたからだ。
「ショーペンハウアー、マーカス・フリントです……この子は最高の試合を作りますよ！」
ウッドとフリントは目を丸くして俺達を見た。対する俺達は首を傾げる事しか出来なかった。

授業が全て終わり、放課後になると俺とハリーが呼び出された。場所はクィディッチ競技場と呼ばれる広い場所だった。
「ハリー、まさかお前が入学してすぐにこんな事になるなんてな」
待機していたウッドが、にこやかにハリーに話し掛ける。フリントもこちらに歩いてきた。
「忘れちゃいないぜレネ、お前も呼ばれるなんて思ってもいなかったがな」
こちらもちょいと棘はあるがフレンドリーな挨拶を掛けてきた。そしてその2人の間に居たのは俺達を呼んだ張本人、マクゴナガルだ。
「貴方達にはテストを受けて頂こうかと思います。合格する事が出来れば百年振りの1年生でのクディッチ選手となるでしょう」
ハリーがイマイチよく分かっていない顔をしている。俺も同じ様

な物だった。ウッドとフリントは心配そうに俺達を見ている。
「大丈夫かハリー？」
「まさか、クィディッチを知らないのか？」
心配するウッドを余所に、フリントの問いに2人して頷くとマクゴナガルが口を開く。
「クィディッチは魔法使いの間で盛んに行われているスポーツです。とても楽しい物ですよ」
「スポーツか、面白そうだな」
俺はすぐに理解した、用意されているのは箒と幾つかのボール……中にはガタゴトと動いている物まである。箒で空を飛んで行うスポーツなんて、楽しそうではないか。
「そうだな……ほらハリー、この箒で飛んで今から俺が投げるボールをキャッチしてご覧」
ハリーは訳が分からないといった様子ながら、ウッドに従って箒に跨がる。それを見届けたウッドは明後日の方向へボールを投げると、ハリーは高速でボールに接近し、巧みな箒捌きでボールが落下に入る前にキャッチする。
「素晴らしいっ！」
マクゴナガルが小躍りして喜んでいる……それなりに年をとっている筈なのに、まるで無邪気な子供の様だ。
「俺もやんのか？」
「いや、お前はこれを持て」
フリントに渡されたのは木製の棍棒、しげしげと眺めていると指示が飛んでくる。
「あの線からあの線まで箒で飛べ、その間にボールを投げるからその棍棒を使ってあの的に打ち返して当ててみろ」
「ほーん、解った」
置いてある箒に杖を振り、足を乗せて後ろ足で地面を蹴る。ふわりと浮き上がる事を確認したら指示された方向へと飛ぶ。
「なっ……！」
「嘘だろ……！」

フリントとウッドが驚愕の表情を浮かべる中、マクゴナガルは興奮して口を開く。
「やはり見た通りでした！」
左手をポケットに突っ込み、右手の棍棒をクルクル回転させて指示された位置の中頃に差し掛かった頃、フリントからボールが飛んでくる。
「そーら……よッ！」
ガキン！と音を立てて打ち返したボールは人形の的の頭を砕いた。ヒュウ、と口笛を鳴らしてフリントの元へ戻っていく。
「どーよ？」
「ちょ、ちょっと待て。その乗り方は……」
「レネ、もしかしてその乗り方はスケートボードのものじゃないの？」
「お？よく分かったなハリー」
「スケートボード？」
ケケケと笑ってハリーを見る。ウッド、フリント、マクゴナガルもつられてハリーを見た。
「マグルの世界のスポーツの1つです、少しだけしか見たことがないんですけど、色々な技を決めてるんです。カッコいいスポーツですよ」
「それが、レネの箒の乗り方だと？」
「……先輩、もういっちょ投げてくれよ」
そう言って棍棒を投げ捨て、先程の位置へと戻っていく。今度は右手をポケットに入れて左手をフリーの状態にしておく。
フリントからボールが飛んできた、俺は足の接着を外して屈んでから左手で箒を掴み――
「オラァッ！」
直前でスピンし、勢いをつけて右足でボールを蹴った。ボールは的の胴体を砕き、とうとう的は崩れ落ちていった。それを見届ける頃には、俺は既に箒に乗っていた。
「凄い……凄い、凄い！」
マクゴナガルは大はしゃぎ、俺の中のマクゴナガル像が崩れ落ちて

いくのを感じる。まあ、今の方が面白い教師なのだが。
「ワンフットテールグラブっつうトリックだ、見てもらった方が早えと思ってな」
「凄いやレネ！もしかしてプロだったの!?」
「遊びでやってただけだハリー、スケートと違って元から空を飛んでいる分簡単なんだよ」
　トリックは空中で技を決める＜グラブ＞系が難度の高い分評価が高い。しかし空中を飛んでいるなら自分の好きなタイミングでトリックを決められるし、何より段差等の障害が一切ないのだ。
「次は2人で試験をしましょう！」
「本当にやるんですか？」
「グリフィンドールと合同なんて……」
　マクゴナガルはフリントの発言を手で制するとにっこり微笑み、フリントは引き下がってウッドと一緒に箱を持ってきた。中には3つの玉が入っていた。
　その内2つは鎖で封がされており、なんかガタゴト揺れている。
「真ん中のボールはクアッフル、チェイサーがクアッフルをゴールに入れれば10点だ」
「その左右にあるのがブラッジャー、試合中に飛び回って選手にぶつかって妨害する。今からこのブラッジャーを2個解放するからポッターは5分間逃げ切れ。ショーペンハウアーはポッターを5分間守りきれ」
　ちょっと待てや、そのブラッジャーっての金属じゃ……と言い掛けて急いで棍棒を持って距離を取る。ウッドとフリントが既にブラッジャーを解放しようとしていたからだ。
「ハリー！来い！」
　ポカンとしていたハリーに此方へ来させ、それと同時にウッドとフリントが叫んだ。
「「開始！」」
「うおっ!?」
　襲い来る殺人鉄球を叩き落とすが、もう1個がハリーに向かう。

「チィッ！」
すかさず棍棒をぶん投げてブラッジャーの軌道を反らす。跳ね返った棍棒を空中でキャッチしてハリーに叫んだ。
「逃げろ！流石に両方は捌ききれねぇ！」
ハリーは返答せず、だだっ広い競技場の中央へと飛んでいく。こんな事でまごつく様な奴じゃなくて助かった。
兎に角飛び、打ち、漏らしたブラッジャーをハリーが避け、それを遠くへ打ち払うという行動を繰り返す。
が、数分後に問題が起こった。ハリーが片方のブラッジャーを見失っていた様だ。
「ハリー！来い！」
またもやブラッジャーを打ち返し、キョロキョロするハリーに叫んだ、しかし見失ったブラッジャーに恐れているのか動こうとしない。
「俺を信じろッ！」
その瞬間、ハリーは俺目掛けてフルスロットルで飛んでくる。ニヤリと笑ってハリーの真後ろから迫っていたブラッジャーを見据える。
「真っ直ぐ飛んで行きやがれ！」
ハリーに声を掛けて一気に急上昇、箒を手に持って空中で縦回転する。タイミングは完璧だ。
「ドンピシャだぜえええッ！」
ブラッジャーの真上からカカト落としを決め、ブラッジャーが競技場の芝生に埋まった。マクゴナガルが手を合わせて跳び跳ねてるのが見える……全く、愉快な婆さんだぜ。
「「アクシオ・ブラッジャー！」」
ウッドとフリントの呪文が聞こえ、ブラッジャーが軌道を変えて２人の前に落ちた。俺とハリーはゆるゆるとスピードを下げ、マクゴナガル達の元へ飛び始めた。
「ありがとう、助かったよレネ」
「なぁに、テメェが俺を信じていたから助かったんだ、別に礼は要らねぇよ」
並走しながら拳を向けてやると、ハリーは無邪気に笑って拳を合わ

せた。

唯我独尊で傍若無人

「2人共、文句なしの合格です！」
　マクゴナガルは大いに頷き、ウッドとフリントもこちらを向いて言った。
「嬉しいぞハリー！まさか今年から入る事になるなんてな！大歓迎だ！」
「あんな動きを見せつけられては認めざるをえないな……頼んだぞ、レネ」
　ウッドとフリントは手を出し、俺とハリーは握手に答えた。俺はクィディッチをやってみたかったので問題なく入ったが、ハリーの方は未だに少し迷っている様だった。
「どうしたよハリー、やりたくないのか？」
「何っ!?本当かハリー！」
「……う、うーん……」
　ウッドに詰め寄られて居心地が悪そうなハリーの頭に手を置き、問い掛けてみる。
「おおかた、1年生の僕なんかが……なーんて思ってんだろ？」
「！」
　図星だ、表情を見れば……いや、反応を見なくても分かる。気の弱い奴だからその位は余裕で想定できるのだ。
　ハリーの顔を覗き込む。
「ソンするぜハリー、さっきお前も聞いただろ？1年生のクィディッチ選手は百年振りだってよぉ。こーんな楽しそうな事、首を突っ込まなきゃあ一生後悔する事になるぜぇ？」
「レネ……僕は……」
「ま、決めるのは俺じゃねぇ。好きにやったらいいぜ、ハリーちゃんよ？」
　ゲヒヒと下衆染みた笑いを向けられたハリーは俺に苦笑いし、ウッドに真剣な表情を向ける。
「やります、やらせて下さい！」

「よく言った！それでこそ男だ！」
ウッドはハリーの両肩に手を置き、嬉しそうに揺さぶった。あ、メガネ落ちた。
マクゴナガルは嬉しそうに近付いてきて俺達に言った。
「２人共、自分の箒は持っていない筈ですね？ご祝儀として、２人に私からお好きな箒をプレゼントしましょう。どの箒でもいいですよ」
「……え？俺もくれんの？」
そう、マクゴナガルはグリフィンドールの寮監だからハリーのを買うのは分かる。だが、スリザリンの俺に買う義理は全く無い筈だ。
マクゴナガルは首を横に振った。
「何を隠そう、私はグリフィンドールの寮監である前にクィディッチが大好きなのです」
「いや隠れてねえ、全く隠れてねえ！」
これには大いに納得してしまった。さっきまでのマクゴナガルを見れば納得せざるをえない。
「スリザリンのラフプレーにはほとほと愛想が尽きていましたが貴方は別です。最高の箒で今の動きを見る事が出来るのかと思うと……」
「わ、分かったから、落ち着いてくれ」
ハリーは思った、レネがここまでたじたじになった事があっただろうか、と。マクゴナガルは何かの冊子を数冊俺に渡した。
「現在販売されている箒のカタログです、２人共よく考えてから私に伝えて下さい。あ、後ショーペンハウアーには足に専用のプロテクターが必要かもしれませんね……」
マクゴナガルはまたアッチの世界へ行ってしまった。とはいえ、これは嬉しい話だ。ウッドとフリントに別れを告げて一刻も早くカタログを見る為に、俺達は大広間へと向かった。

「……」
「どうしたよドラコ？」
「貴方がクィディッチの代表選手に選ばれたから拗ねてるのよ……

あ、レネ、おめでとう」
「おう……しっかし相変わらずデザートばっかよく食うなぁダフネ」
「そう？普通でしょう？」
　大広間に来た俺とハリーは晩飯の時間だと気付き、とりあえず先に飯を食うことにした。
　その間ドラコはずっと俺の横でむくれていたらしい……肉食い漁ってて気付かなかったが。
「俺じゃ不満かよ、ドラコ？」
「……いいや、レネはいいよ。さっき覗き見してたけどあんな曲芸じみた箒の乗り方は僕には出来ないからね……問題はポッターだ！あんな動き位なら僕だって出来るさ！」
「あの備品のボロい箒でもか？」
「……」
　またむくれた、まあ普通はあんな箒じゃハリーの動きは真似できねえよな……とフォローを入れてドラコのゴブレットにジュースを注ぎ入れてやったりしてご機嫌を取ってやった。

　夕食後、俺とハリーはマクゴナガルの付き添いという条件の元、許可を得て大広間に残ってカタログとにらめっこを始めた。
　ハリーがその１つを指して言った。
「このニンバス２０００がいいな！今一番最高速度を叩き出す箒だって！」
　ハリーの目が輝いている。ウッドに選手になる事を宣言した事で吹っ切れたのか、出場する事に負い目を感じなくなったのだろう。
「良い選択です。貴方は素晴らしいシーカーになれますよ」
　マクゴナガルはニコニコしながら言った。ハリーは俺にもニンバス２０００を勧めてくるが、首を振って別のカタログを指す。
「俺はクリーンスイープの７号がいい、速度じゃあ負ける様だが急旋回はこっちの方が向いてるみたいだからな……先生が俺に望んでるのはそういうプレイなんだろ？」
「これまた良い選択です、期待していますよ」

柔らかな笑みを浮かべるマクゴナガルは、幾分か若々しく見えた。

「レネ……ちょっといいかい？」

「んぁ？まーだ寝てなかったのか？」

箒を選び終え、談話室に帰ってきた俺を出迎えたのはドラコだった。この陰湿な談話室にピッタリな暗い顔をしてやがる。

「君、ポッターと随分仲が良い様だけど……まさか、グリフィンドールと馴れ合っているんじゃないだろうね？」

「あん？駄目なのか？」

「当たり前だ！グリフィンドールなんかマグルにすり寄るロクデナシの掃き溜めだよ！即刻縁を切るべきだ！」

なんかよく分からない理由で怒っているドラコを見てケタケタと笑う。ドラコはそれを見て更に不機嫌になっていく。

「何がおかしいんだよ！」

「ゲッヒッヒッヒ……いちいちそんな事に目くじら立てて、ちっせぇなあと思ってよ」

ドラコは血管ブチギレ寸前といった所だ、俺はそんなドラコに続けて言った。

「俺は俺のやりたいようにやる！気に入った奴にはとことん絡むし気に入らなきゃあほっとく！今日気に入らなくても明日面白けりゃあそれも良いさ！この俺の行動をを止められるもんなら力ずくで止めてみやがれってんだ！」

中指を立て、ヒャーッハッハッハッ！と大笑いしながら寝室へと歩いていった。ドラコは怒りを忘れて燃える暖炉の前で立ち尽くした。

「……じ、自分勝手過ぎる……」

人の事は言えないと頭で理解しつつも、そう呟くしか無かったのだった。

「いや、早すぎんだろ」

次の日の朝、大広間にワシミミズクのアーディが長細い荷物を器用に持って飛んできた。疲労困憊のアーディを尻目に包みを開けると、

足掛けの付いていないクリーンスイープの7号とレッグガードの様な物が入っており、チラリとマクゴナガルを見てみると此方を向いて微笑んでいた。正直引いた。
「新しい箒！クリーンスイープの7号じゃない！一体誰の贈り物なの!?」
「……マクゴナガル」
ポツリと呟くと、ダフネもマクゴナガルを見て表情を固めていた。あんなゴキゲンなマクゴナガルは、誰も見たことは無いだろう。
取り敢えず、俺は箒を持ってハリーの居る机の方へと向かった。
「よぉ、ハリー」
「見てよレネ！ニンバス２０００だ！」
ハリーの居る場所は人だかりが出来ていたのですぐに分かった。新しい箒、その上世界最速の箒ともなれば人が集まるのも当然だ。
俺は笑ってハリーに言った。
「行くか？」
「もちろん！」
朝の授業が始まる迄にはまだ時間がある、俺達はクィディッチ競技場で思い切り飛び回った。備品の箒とはエラい違いで速度、キレ、安定性のどれを取っても文句なしと言える代物だった。

「ふむ……良いだろう」
「よっしゃ」
昼過ぎにはスネイプによる最後のテストが待っていた。サラマンダーの血が黒ずんだ中身の鍋を見て、表情を動かさずにスネイプは頷いた。
「しかし強化薬は教科書にまともな作り方が書いていない筈だ、図書室で確認したのか？」
「いいや、自前で買った本に書いてあった。中々役に立つもんだなコレは」
ヒラヒラと分厚い本を出すと、スネイプも納得した様に口を開いた。

「許可を出す前に忠告しておこう。この世に間違いの無い魔法薬の参考書は、我輩の知りうる限り1つとして無かった。疑問を感じたなら鍋を爆発させる前に我輩に聞く事だな」
「……ん？それってつまり先生は全ての正解を知ってるっつー事か？」
「そうだ、そして貴様はそんな魔法薬の世界に足を踏み込んだのだ。精々用心する事だな」
スネイプはそれだけを言い残して教室から去っていった。中々に無愛想だが、アレはアレで俺の事を心配しているのだろう。
「ま、それはそれとして……」
ホグワーツへ来て一番の（極めて邪悪な）笑顔を浮かべる。魔法薬作りの許可が出た、これ以上嬉しいこともそうそう無い。持っている材料で作れる魔法薬をリストアップしたメモを取り出し、早速作成に取り掛かった。

「おい、アレ……どうするよ？」
「……」
昼からの授業も終わった頃、魔法薬の教室の外に2人の男が居た。片方の名はグラハム・モンタギュー、スリザリンのクィディッチ選手だった。もう1人はエイドリアン・ピュシー、何も言わない彼もまたクィディッチの選手である。その2人は教室を覗き込んでは相談を繰り返すというループ作業を繰り返していた。
「ヒーッヒッヒッ！イイーッヒッヒッヒッ！」
その問題の教室からは、甲高い笑い声が廊下にまで響き渡っていた。声の主は目深にフードを被り、狂った様に鍋をかき回しており、その内容物が発する緑の蛍光色が隠れた顔を照らして、それこそ闇の儀式とも呼べる様相を呈していた。
因みにスネイプに気付かれて煩いと怒られた。
「ワザワザすまねぇな、しかし別に気にせず声を掛けてくれても良かったんだぜ？」

「さっきのは中断させたら俺達の命に関わりそうな儀式だったからな」
　そんなことないぜー、ただ普通に魔法薬作ってただけだぜー。っとか言いながらピュシーの後ろをついて歩いていく。なんでもフリントが俺を呼んでいるらしい。
「チームに自己紹介でもすんのか？」
「いや違う、まあ見れば分かるさ」
　程なくして競技場に到着した俺は、スリザリン生の7人の男達に囲まれていた。正面に居たフリントが口を開く。
「俺はこのレネ・ショーペンハウアーをチームのビーターに迎えるつもりだ、異議のある奴は手を上げろ」
　すると、フリントを除いた6人が一斉にビシッと手を上げる。その中でも左前に立っていた男が俺を肉親の仇かとでも言いたげな程に強烈な形相で睨んでいる。
「やっとの思いでチームメンバーに入れたんだ。こんな1年坊主に取られてたまるかよ！」
「落ち着けデリック、こういう時はどうすれば良いのか分かっているよな？」
　デリックと呼ばれた男は箒に跨がり、空中へ舞い上がった。フリントは備品よりも余程上等な箒を取り出し、棍棒と共に俺に差し出した。
「これから試験を行う。デリックとお前でボールを打ち合い打ち返せなかった方の負け。明らかに打ち返すのが不可能だという程にズレた軌道で打ち返しても負けだ。俺のお下がりだがこの箒を貸してやるから――」
「要らねえ」
　棍棒だけを受け取り、ローブの懐に手を突っ込んでずるりと箒を取り出し流れるように舞い上がる。男達は仰天して俺を見ていた。
「今の、一体どこから……」
「それよりも見ろ！箒の上で立っているぞ！」
「なんなんだ、なんなんだアイツは！」

冷静なのはフリントだけであり、これから試験を行うデリックですら呆けている。クククッ、と笑みを浮かべて箒の柄を少し上げた。
「さ、始めてくれよ」
「初めはデリックからだ、開始！」
フリントは掛け声と共にボールを投げる。デリックはハッとしてボールを打った。少し右だ。
「おらよっ！」
カキンッと小気味の良い音を立ててデリックの顔めがけてボールが飛ぶ。デリックは怯みつつも打ち返す。が――
「しまっ――」
焦るデリック、ボールの軌道は俺よりも明らかに下方へと飛んでいた。
「そーらっ！」
俺は箒を軸に体を倒して丁度体が下になった所でボールを打ち、回転の勢いでまた体は元の位置へと戻っていった。打ち返されると思わなかったのか、デリックが遅れて打ったボールは勢いが無くふわりと舞い上がっている。
「トドメェッ！」
まるでテニスのスマッシュの様に打ち落とす。襲い来る豪速球のボールに怯んで顔を反らしてしまい、デリックの棍棒はボールを弾くだけであらぬ方向へと飛んでいってしまった。
「勝負有り！」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！驚いている隙を突くのは卑怯だぞ！再戦を要求する！」
「正気か？年下に負けて言い訳をするなんて恥知らずも良いところだぞ」
デリックは喚いて異議を申し立てるが、フリントは冷たくあしらった。しかし俺は笑って棍棒を手離して叫んだ。
「良いじゃないですか、再戦してあげましょうよ先輩！ハンデ付けてあげますから！」
ポカンと間の抜けた顔で俺を見る男達、しかしデリックはすぐに顔

を真っ赤にして俺を睨み付ける。そんな中、フリントだけはニヤニヤして俺に頷いた。

「よし、もう一度デリックからだ」

そうして放り投げられたボールを、デリックは俺の顔目掛けて力の限り叩き付けた。それこそ、体勢を崩す程に。

「あまぁーい！」

箒から足を離して前方宙返り、カカトでボールを打ち返す。速度の乗ったボールはデリックの顔面を直撃、意識を失うには十分の威力だった。